

元興寺物語

佐藤 良士

ぼんぼん盆の十六日に 地獄の地獄の蓋があく
地獄の釜の蓋があく ぼんぼん盆の十六日に
地獄の亡者が出てござる

今年も極楽院さんの「^{うらぼんえ}孟蘭盆会」の行事が終ると、
^{とうかえ}燈火会、春日さんの^{まんとろう}万燈籠、高円山の大文字と続く
奈良の夏も終り、ようやく奈良町界限にも静かな時
に戻るのをごさいます。

奈良町の極楽院さんの正面に、近年「世界遺産 元興寺極楽坊」の石碑が建てられたのをご存知でしょうか。「古都奈良の文化財」として、この寺が世界遺産に指定されたのは1998年。しかし今この寺の伽藍史跡として残るのは、奈良町の町中にひっそりと残る「元興寺極楽坊」だけ、それも元興寺という名前さえも長い間忘れられ、このお寺は「奈良町の極楽院」として、長い時間を過ごしてきたのです。世界遺産元興寺、遠い昔、奈良に都があった頃、この地には興福寺や東大寺に負けない大伽藍が建てられていたのでございます。そればかりか、飛鳥に仏教文化の華が開いた頃、日本で最初の大寺として建立されたのが、このお寺でございます。お盆は遠いご先祖のことを考える時、今宵は夕涼みがてらにこのお寺の物語をお聞き下さい。



智光曼荼羅 元興寺の前身、法興寺が飛鳥に建立されたのは、百濟から仏教が伝えられてから半世紀後の596年のこと、塔を中心に三宇の金堂を配する壮大で華麗な伽藍に、飛鳥の人々は仏教の偉大さを見たこととございましょう。このお寺を建てたのは大臣の蘇我馬子様、蘇我氏の私寺であったこのお寺が、蘇我氏の滅亡後も飛鳥仏教、飛鳥文化の中心として栄えましたのは、日本で最初の大寺として揺るぎない地位を築いたからでございます。

法興寺が平城京の外京に移されたのは、遷都から8年後の718年のこと

ふるさとの 飛鳥はあれど青によし 奈良の明日香を見らくし

坂上郎女様のお歌にありますように、まだ草深い平城の地で、人々は再現されました元興寺の壮麗な伽藍に、明日香の風景を思い描いたのでありましょう。

この地でも元興寺は仏教教学の中心として、優秀なお坊様がたが集まり、学問の研鑽に励まれました。三論宗の智光さま、頼光さま、法相宗の神叡さま方で、このお寺は南都七大寺の一寺として、輝きを放っていたのでございます。

ところで、極楽院の本尊「智光曼荼羅」には、この智光さまにまつわる不思議なお話しが伝わっておりますが、それは次のようなお話でございます。

奈良の元興寺には智光・頼光という二人の学僧が居られ同じ僧房に住んでおられました。智光さまは学問を好み、一心不乱に経論を読みふけて極楽往生を願っているというのに、頼光さまの方は学問もせず、また物も言わずいつも寝てばかり、そのうちにあっさり死んでしまわれたのでございます。智光さまは頼光さまの死を哀しみ、「頼光はどうしているか知りたいものだ」と心中に祈っておりましたら、ある日夢の中で、極楽にいる頼光さまを見たのでございます。

「あの寝てばかりいた頼光が極楽にいるのに、私が極楽に行くためにはまだまだ長い研鑽を積まなければならない。こんなことがあってよいものか」

と、智光さまが嘆き哀しんでいますと、阿弥陀仏が現れ、右の掌(たなごころ)を挙げて小浄土の様子を示され、「ただ浄土の莊嚴を觀ぜよ」と仰られました。

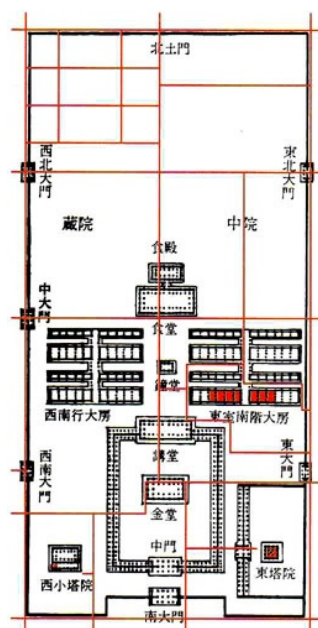
夢から覚めた智光さまはさっそく絵師を呼び寄せて、いま夢に見たばかりの浄土の図を描かせ、一生これを觀じて、ついに往生を得たのでございます。

曼荼羅には中央には阿弥陀仏、左右に観音、勢至をはじめとする十八菩薩、そして浄土世界の前景に彼岸へと渡る橋があり、その上には智光さまと頼光さまが居られて、極楽浄土に渡ろうとしているお姿が描かれております。

このお話は私には難しいお話ですが、曼荼羅を眺めておりますと、まことに私共のような無学のものでも極楽往生が叶うのではないかと思えるのでございます。

平安京へ 平城の都は80年足らずで、都は平安京に移されましたが、それから百年後の貞観6年(864)には「都城、道路変じて田畝になる」といわれるように、かつての都は田園に戻ってしまいました。しかし、かつて平城京の外京といわれたところは、中世以降も都市として生き続けたのでございます。それはここには南都を代表する興福寺、東大寺の二大大寺が遺され、なかでも興福寺は藤原摂関家の氏寺の立場を利用して、南都のみならず大和一国の支配者の地位を獲得、荘園の増大、強訴や武力行使で勢力の拡大を図っていくことになるのでございます。

また平安末期には興福寺の中に院家が独立しておりました。院家は、貴族出身の身分のある僧の住む建物、組織、機構をいいますが、寺院という言葉が示すように、寺の中の寺のようなもの、本寺とは別に本尊や経



(伽藍図)

典を持ち、独自の所領を持っておりました。平安・鎌倉時代に五、六十の院家がございましたが、なかでも近衛家の一乗院が興福寺の北に、九条家の大乘院が南にそれぞれ領地を得て、奈良の町の形成に大きな影響を持つようになるのです。

がごぜ
元興神 興福寺や東大寺が隆盛の道を辿ったのに対して、国家や貴族の後ろ盾を持たなかった元興寺は次第に衰退の道を辿らざるを得ませんでした。

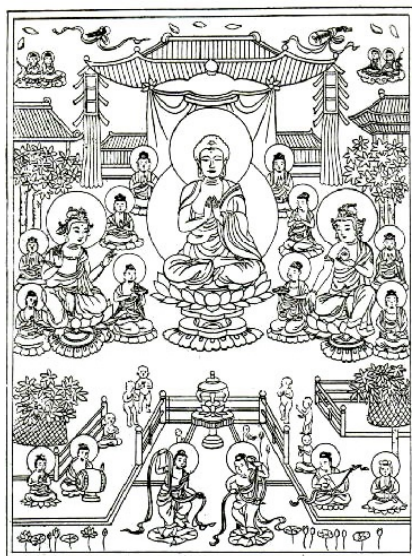
元興寺に住み着いたがごぜ（元興神）の鬼のうわさが人々に伝わったのもこの頃でございます。鬼は口が耳まで裂け、腕はけむくじゃらで、伸びた鍵爪と怖ろしげな鬼相で、鐘楼から乗り出すようにして都人を怖がらせるのでございます。ところがある時、これを聞いた大変力の強い坊さんが見事に鬼を退治されました。鬼は坊さんに追われ逃げて行きましたが、しばらく行った辻で忽然と姿を消してしまいました。この辻は不審ヶ辻と呼ばれ、今も町の名に残っております。

しかし、この頃不思議なことが起こっておりました。それはかつて智光さまの住居の極楽坊が、浄土信仰の聖地とされて人々が集まり始めたのでございます。そして智光曼荼羅説話が世に知られるようになり、曼荼羅は極楽坊の本尊として人々の信仰を集めるようになりました。時代は末世の世に向かっておりました。人々は極楽往生を願い、極楽院では阿弥陀様の元に参りたいと願う人々によって百日間の念仏講が行なわれた。大合唱しながら極楽往生を願う行法で、この百日念仏は鎌倉時代には7日念仏が恒例となり、庶民が参加できる念仏講に変わっていったのでございます。こうして元興寺は古代寺院としての姿は失なわれ、中世の念仏者集団の寺へと変わっていくのでございます。

四面郷から南都七郷へ 『西御門西里あたりの「別当僧都童子牛丸」の家から出火し、近隣9軒を焼いた。その火は興福寺に飛び火し、窪院、伝法院、北円堂などを焼いた』

これは永承4年（1048）、2月の出来事です。これから平安時代の奈良の様子が窺えます。

「別当僧都童子牛丸」は、興福寺別当の牛車の御者で、その家は興福寺の西御門西里にございました。平安中期のこの頃には興福寺の回りには「里」と呼ばれる門前郷が形成され、里には興福寺で働く寺人や工人、仏事や行事のための楽人や舞人、また彼らの生活を支える商人が集まり、近隣9軒が類焼するほど家が密集し



ておりました。平安時代の京の町中のような風景が、奈良にもあったのでございます。

治承4年(1181年)12月28日、平重衡の平氏軍による焼き討ちは、南都に東大寺の大仏殿炎上など大きな被害をもたらしました。興福寺も金堂・講堂・北円堂・南円堂、塔などが焼かれ、回りの「里」も多くが焼かれてしまいました。

南都の鎌倉時代はこの争乱の復興から始まります。興福寺の再建事業をリードされましたのは、藤原摂関家出身で興福寺別当で信円さまで、寺院の再興と同時に南都の町の復興にも取り組まれ、興福寺の四面の里を七つの郷に再編、これが「南都七郷」と呼ばれる町で、それが発展して室町の終りごろは、応仁の戦乱に見舞われた京都よりも賑わっていたのでございます。

中世の奈良ではまた、東大寺七郷、元興寺郷、一乗院郷、大乘院郷と呼ばれる門前郷も、それぞれの寺社を中心として形成され、今日に見られる市街地が造られていき、この頃には今日の町と同じ名前の郷が作られておりました。

三条郷、登大路郷、今辻子郷、^{すくいん}宿院郷、小西郷、椿井郷、^{もちいどの}餅飯殿郷、西御門高間郷、高間辻子郷、高畠郷、菖蒲池郷 などがそれぞれでございます。

元興寺炎上 衰運と解体の道を辿っていた元興寺にとって致命的な痛手となったのは、宝徳3年(1451)の元興寺炎上でおりました。この年の10月14日、徳政を号する土一揆で小塔院より出火、金堂以下の主要堂宇のほとんどを焼亡し、わずかに焼け残ったのは東院塔の五重大塔と観音堂、それに極楽坊ぐらいでございます。

さらに、その後の戦国期の騒乱の時代を経て、徳川時代初期にはかつての金堂・講堂など、かつての元興寺の中心部には町家が定着し、中新屋、芝新屋、西新屋などの町が形成されておりました。そして、極楽坊はいつの頃から極楽院と呼ばれる独立した寺院になり、観音堂と五重大塔を中心とする一画がひとり、近代に至るまで元興寺の名を称することになったのでございます。

^{なら そうじゅう}
奈良惣中へ 奈良の中世においては門前郷である奈良の住人たちは、延徳4年(1492)に出された興福寺の「奈良中掟法」に「奈良中止住の輩は皆以って寺社の公人・被官人なり」とあるように、社寺の下人であり、従属民であり、住人たちは労役や祭礼の奉仕の義務や、職能の分化により地子納税の義務が課



せられていました。興福寺は大和守護の権力を行使するため「衆徒」と僧兵の代表機関として衆中（衆徒20人）を組織し、これに南都七郷と東大寺、元興寺の検断権（警察権）を行使させたのでございます。やがてこれを足場にして衆徒・国民らの奈良進出が始まります。彼らは興福寺が支配していた荘園領の監督者として、その土地を支配するようになりました。戦国期に大和郡山の筒井に勃興し、やがて大和の支配者になる筒井順慶の筒井氏も、そのような衆徒の一員でございました。

天文元年(1532)、有力町人をリーダーとして本願寺門徒郷民が決起、興福寺に乱入いたしました。新仏教の進出を嫌って本願寺門徒を弾圧した興福寺に対する大坂本願寺の反撃でございました。この一揆は制圧されたが、この事件をきっかけとして、南都七郷、東大寺郷、旧元興寺郷の結束が進み、やがて「奈良惣中」という惣町自治組織が成立していくのでございます。

戦国の争乱がおさまり、豊臣氏が政権をとると大和は豊臣秀吉の弟、秀長が領主となります。秀長は奈良代官を置き、代官のもとに12の町を櫃本（はこもと）として、町民による自治組織を作りました。これが奈良惣中（ならそうちゅう）と呼ばれるもので、郡山の町にもこれと同じような自治組織がございました。

やがて慶長8年(1603)に徳川幕府が成立すると、奈良町は徳川幕府の直轄地として奈良奉行所が支配することになり、奈良町は奈良晒、奈良墨に代表される産業の町へと発展していくことになるのでございます。

和州南都の図 別紙の古地図は現存する近世奈良の町絵図の最古のもので、寛文6年(1666)に作成されました「和州南都之図」でございますが、これを拝見しておりますと奈良の市街地の範囲、東大寺、興福寺の境内の様子などは現代とあまり変わっていないと思われます。変わったのは興福寺の北側の一乗院のあたりが奈良県庁や裁判所の公共施設が建ち並んだこと、南の大乗院の範囲に奈良ホテルを始め観光ホテルが建ち並んだことなどが大きな違いでしょうか。また別の南都名所図会では、元興寺の五重塔が南都の名所として誇らしく描かれているのでございます。

ところが、江戸末期の安政6年(1859)2月28日、毘沙門町からの出火はこの元興寺大塔に飛び火、大塔、観音堂は残らず灰燼に帰してしまいました。元興寺の名を伝え、奈良名所の一つとして有名をさせ



た観音堂、五重大塔も礎石のみになってしまい、明治以後、わずかに生き残った極楽院の本堂、及び背後の禅室も廃仏棄稀の嵐を受け、寺は西大寺預けとなり、事実上、無住の状態が続いたのでございますが、昭和の大戦後一人の青年僧と彼を支援した人々により、元興寺は世界遺産に登録するまでになるのですが、それはまた後のお話してございます。

明治維新の波は奈良にも変革をもたらしたが、もっと大きな波紋は神仏分離令で、春日社兼興福寺の巨大組織が崩れたことでもございました。さらに明治4年の廃藩置県で社寺領が没収され、興福寺は東室が奈良県庁舎に、金堂が警察に、一乗院門跡が裁判所に、さらに食堂が壊されて市範学校になるなど、寺地の大部分が奈良県の中央官庁街に変わっていきました。この間、東部の山手は廃墟となり観光客も途絶えましたが、明治20年に奈良公園が県立公園に指定され、春日野に緑の芝生が戻って、奈良は近代観光都市へと歩み始めるのでございます。

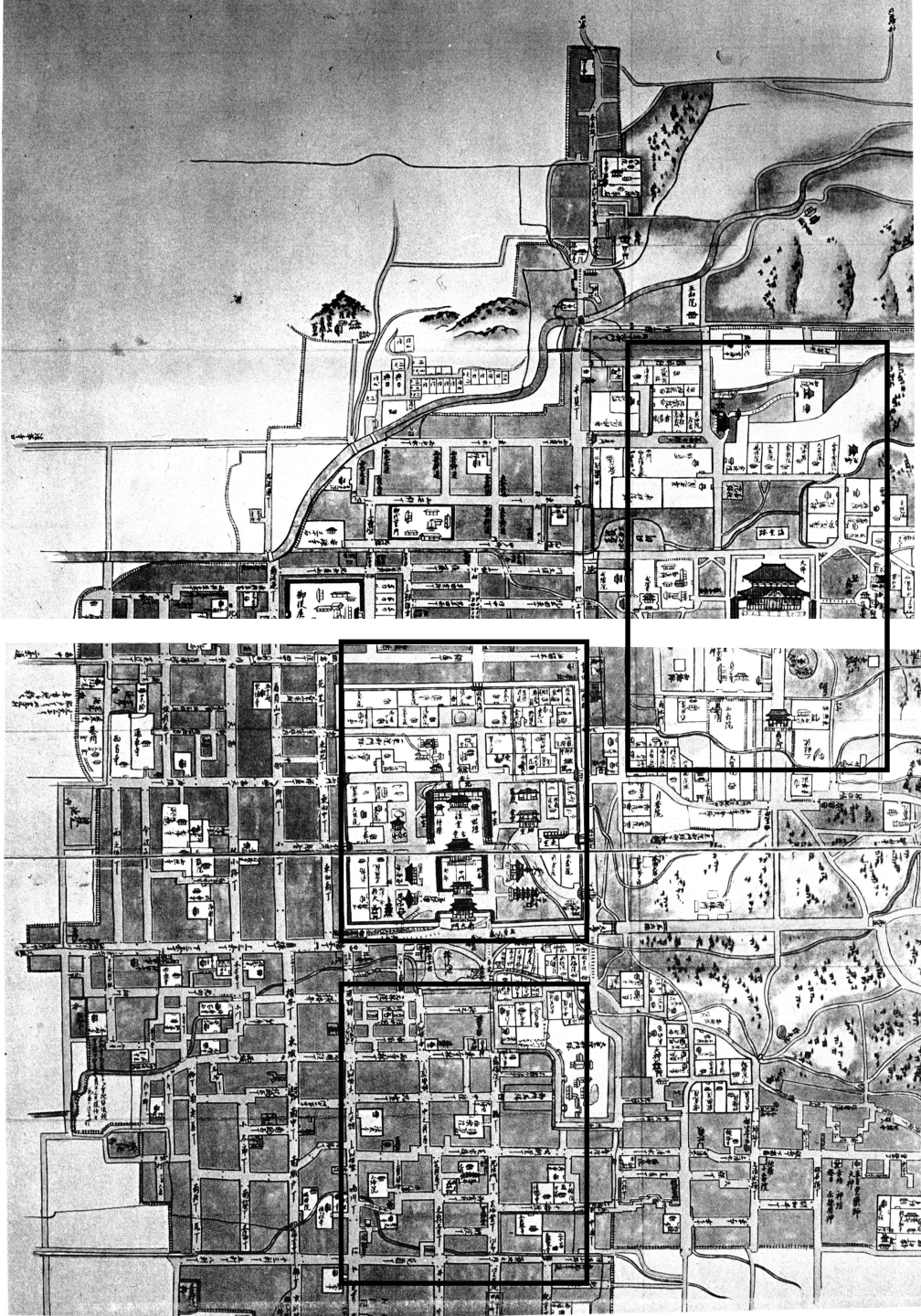
極楽坊復興 第二次戦争後、この寺の名目上の住職であった、高野山大学教授の辻村泰円師が小子坊を改造して極楽坊保育園を創設、過去の暗い印象を払拭することで復興の第一歩を踏み出したのは、昭和24年でもございました。

これをきっかけとして極楽坊に復興の機運が生まれ、泰円和尚師の本腰とともに、まず禅室が再建されたのでございます。続いて本堂の解体修理が始まったのでございますが、解体前の本堂の屋根裏には中世以降の破損仏やコケラ経がぎっしりと放り上げられてありました。いまそれらは、重要民俗資料の指定を受けて元興寺文化財研究所に保管されているものですが、二十八、九年当時は、辻村氏が支援者と一緒に屋根裏に登り、ほこりまみれになりながらこれらの雑物を炭俵に詰め込み、上から下にポンポン投げ下ろしたものだそうでもございます。

やがて本堂の解体修理も終ってこの本堂は禅室とともに新しく国宝に指定されました。とともに禅室の軒先と民家の屋根が2メートルそこそこしか離れていなくて、防災上大問題だということで国庫補助を受けて周辺民家の立ち上げ買い上げが「環境整備事業」として実施されました。これは元興寺というかつての大寺の境内に、どれほど多くの民家が中世以降に建ち並ぶことになったか、という一つの証拠でもございましょう。

こうして智光曼荼羅ゆかりの元興寺極楽坊が復興し、おびたしい重要民俗資料を整理研究するために元興寺民俗資料研究所が設立され、これが核となってさらに組織を発展拡充させた元興寺文化財研究所が設立されたのでございます。

この民間の研究所で、稻荷山古墳出土の鉄剣から有名なワカタケル大王金象嵌名が発見されたのはまだ記憶に新しいことでもございますが、それは長い長い元興寺の苦難の歴史を少しでも癒してくれる記憶のように思えるのでございます。



寛文6年（1666）和州南都乃図（天理図書館蔵）

四角は創建時の興福寺（左）、元興寺（下）、東大寺（右）の寺域

参考資料 日本歴史叢書「奈良」永島福太郎著 「中世の奈良」安田次郎著